

## 博士学位論文審査報告

題 目： 二〇世紀文芸のメディア変換と流通の諸相  
——物語の構造分析理論と市場性獲得の構図——

氏 名： 江藤 茂博

論文審査委員： 主査 稲田 篤信 本学文学部教授  
副査 山口 直孝 本学文学部教授  
副査 岩佐 壮四郎 関東学院大学教授  
副査 家井 眞 本学文学部教授

### 論文内容の要旨

本論文は19世紀後半から20世紀の文芸、およびその映像化された作品を事例研究の対象に選び、テキスト論の立場に立って言語表現と映像表現を物語テキストとして同じ位相で分析の対象として「メディアミクス」（メディアの接合や変換）の諸相の分析を行い、それぞれのテキストの特性と差異、物語再構築の力学を論究したものである。

また、本論文では文芸や映像の作品を資本主義社会における商品の制作から流通、受容の一連の関連性を表象するモノと考え、「パッケージ」という用語を用いて概念化している。このことによって、言語表現同様、映像表現においても、個人消費のパッケージメディアとして対象化できるという立場から個別事例を論じている。

本論文の構成は以下の通りである。

本論編

序論

趣意

第一部 言語表現と映像表現

目次

はじめに

第一章 映像論の試み——テキスト・平面・時間

第二章 喜劇論の試み——チャップリン『街の灯』論

第三章 映像史の試み——メディアの革命

第四章 映画を「読む」ということ——『打ち上げ花火、下から見るか？横から見るか？』（岩井俊二）論

第五章 「映像を読む」ための講義

第六章 大林宣彦の映画を読む——『時をかける少女』と『異人たちとの夏』

第七章 ウディ・アレンの映画を読む——『アニー・ホール』、『スターダスト・メモリー』、そして『カイロの紫のバラ』

第八章 芥川龍之介の小説を読む——『羅生門』と『地獄変』

結び

第二部 筒井康隆『時をかける少女』とその映像化

目次

はじめに

第一章 『時をかける少女』の「小説論」——小説の構造と解説

第二章 『時をかける少女』の「SF論」——SF文学史の系譜

第三章 『時をかける少女』の「読者論」——六〇年代の文化誌

第四章 『時をかける少女』の「続編論」——NHK少年ドラマシリーズ『タイム・トラベラー』

第五章 『時をかける少女』の「文化論」——角川映画という現象

第六章 『時をかける少女』の「構造論」——小説・映画・テレビドラマの物語構造

第七章 『時をかける少女』の「語り論」——小説と映画のナラトロジー

第八章 『時をかける少女』の「少女論」——少女へのまなざし

第九章 『時をかける少女』の「脱構築」——テキストの解体

第十章 『時をかける少女』の「メディアミクス」

結び

第三部 横溝正史『金田一耕助シリーズ』の物語再構築

目次

はじめに

第一章 メディアミクスの出発

第二章 『幽霊男』の映像化とメディアミクス

第三章 横溝正史の小説の観光メディア化

結び

第四部 広がる商品としての表現メディア

目次

はじめに

第一章 オタク文化を歩く

第二章 「ニセモノ」ビジネスの光景

第三章 オタク文化と複製の物語

第四章 資料

結び

結論

主要参考文献目録および初出対照著作

資料編（別冊）

## 序論

序論において、論者は 19 世紀後半以降の近代文学における文芸の商品化と市場形成、文芸ジャーナリズムの成立に言及し、写真と映画の前史、トーキー映画、テレビジョンに至る映像史を略述し、テキスト論的な立場に立って、小説と映画・テレビドラマなど異なる表現メディアから物語性の特徴と差異を取り出すという本論文の立場を述べている。

## 趣意

論者は文学研究と国語教育によって支持され再生産されてきたハイカルチャーとしての文芸、大学の大衆化や出版ジャーナリズムによる文芸の商品展開、メディアミクスなど、20 世紀の「文芸メディア」をめぐる歴史的な経緯を概観し、本論文の関心は総体としての「文芸メディア」の生成と推移にあると述べている。

## 第一部

### 第一章 映像論の試み——テキスト・平面・時間

本章では映画は言語やフィルム、写真といった形態的な差異を超えた意味生成の場所として、テキストとして解読することが出来るというロラン・バルトの記号論的な方法論に立脚し、映像テキストは、同時に存在する複数の記号を解読することで意味の連鎖の生成が成立するという構造を、「平面」と「今」の現前化といった時空の意味論の中で論じている。

### 第二章 喜劇論の試み——チャップリン『街の灯』論

本章ではチャップリン『街の灯』は、映像テキストとしては、観客が登場人物の浮浪者と紳士二役を演じる主人公に向ける視線の二重性、すなわち、「期待される必然的な行為」と「期待される逸脱した行為」のズレや収斂の中に喜劇性が発生するという構造を持つとして、チャップリンの映画はこうしたパントマイムによる「ドタバタ喜劇」の「視覚的なコード」に比重を置くと同時に、個別文化的コードに依存する「物語系のコード」の解読も求められるという点で、サイレントとトーキーの狭間にある作品であると論じている。

### 第三章 映像史の試み——メディアの革命

本章では 20 世紀映像メディアの歴史を主にルドルフ・アンハイムなどの西洋映画史、マクルーハン、ベンヤミンなどのメディア論を援用して論じている。映像を観客の中に生起する言語芸術と同値性を持つ意味作用として捉えることや、映画を複製芸術としての商品、映画館、監督、観客の制度性を神無き宗教性のメタファーとして捉えるなど、近代芸術の特徴を論じている。

### 第四章 映画を「読む」ということ——『打ち上げ花火、下から見るか？横から見るか？』（岩井俊二）論

本章では、1995 年 8 月公開・岩井俊二脚本・監督の映画『打ち上げ花火、下から見るか？横から見るか？』を取り上げ、本作品は、登場人物の生きる物語現実と、「もしも」という仮想の物語

の二重の世界を生きる設定になっていることを指摘し、映画の現実把握の仕組みは、様々な可能体の中から選択されて一つの姿をとっているが、背後の実現されなかった現実を含む総体が物語化されていると論じる。

## 第五章 「映像を読む」ための講義

本章では、岩井俊二監督『Love Letter』と尾瀬あきら作の漫画『夏子の酒』の二つの作品を取り上げ、両者はメディアが異なるものの、共通して、女性像の中に死者の意思を継承し、死者に語りかける巫女的な女性の物語があることを指摘し、現代の表層に潜む前近代性を論じることで、現代メディア作品の特質を浮き彫りにしている。

## 第六章 大林宣彦の映画を読む——『時をかける少女』と『異人たちとの夏』

本章では、大林宣彦監督の映画『時をかける少女』（1983）と『異人たちとの夏』（1988）を記号論的な立場から、物語の空間と時間、画面に示される文字や映像内映像、音、語り手の位相など、観客が遭遇する混乱と意味の形成に制作者の戦略があると論じている。前者からは主人公が2人の男の間で探り当てていく「真実の愛」の物語を、後者からは都市空間の中の異界訪問的な神話世界の物語を読み込んでいる。

## 第七章 ウディ・アレンの映画を読む——『アニー・ホール』、『スターダスト・メモリー』、そして『カイロの紫のバラ』

本章はウディ・アレンの映画を取り上げて、物語テキストとしての語りの構造を論じている。『アニー・ホール』（1977）は内容全体を観客に示していく語り手の語りを読んでいく受け手と、映像上の実体的な語り手の語りを読む受け手の二重化された受け手を創出している。『スターダスト・メモリー』（1980）は、映画の中に3本の映画と登場人物の夢や回想、現実といった物語が入れ子型の構造で収まっている。『カイロの紫のバラ』（1985）は主人公の観る映画の中からその登場人物が抜け出てきて虚実の空間を越境する。

## 第八章 芥川龍之介の小説を読む——『羅生門』と『地獄変』

本章は芥川龍之介の『羅生門』（1915）と『地獄変』（1918）を取りあげて、登場人物である語り手と語られた物語世界の内容との関連性、各存在が支配している領域の位相性を吟味し、前者は作中に現れる語り手と「作者」、登場人物である下人の行為や心理、形象が作品の重層性を作っていること、後者は新聞小説というメディアの特質と相俟って、読者を特権的に支配する語り手として成立していることを論じる。

## 第二部 筒井康隆『時をかける少女』とその映像化

### 第一章 『時をかける少女』の「小説論」——小説の構造と解説

本作は1965年（昭和40年）の学習研究社発行「中三コース」11号からの連載小説が初出であるが、本章ではこうした成立の事情を視野に入れながら、主人公（芳山和子）が最初に遭遇する放課後の理科実験室小説の場面などを取り上げて、小説的時間、場所、主題性を論じている。未来から来た少年である深町一夫への無自覚の思慕の情は、手に入れると同時に消さなければならない性

格を持つものと分析し、伝統的なプラトニックラブの系譜にあるものと論じている。

## 第二章 『時をかける少女』の「SF論」——SF文学史の系譜

本作の登場人物深町一夫が属しているのは西暦 2660 年の未来社会であるが、本章ではその未来性が小説や映画が発表された当時の社会的危機感を反映した現在性を持っていると論じている。西暦 2660 年はヒューゴー・ガーンズバックの SF 小説『ラルフー二四〇四一十』が設定した舞台の年であることを紹介し、あわせて本作の位置を H・G・ウェルズ『タイム・マシン』(1895) や日本 SF 小説史の中で略述している。

## 第三章 『時をかける少女』の「読者論」——六〇年代の文化誌

本章では本作の深町一夫の語る、寝ている間に勉強が進むという未来社会の睡眠教育、また主人公の少女を理系希望とする造型などに、発表当時の受験生の夢が籠められていると指摘している。また本作の受容の背景として、往復書簡集『愛と死を見つめて』(1963) が巻き起こした純愛ブーム、売春禁止法の公布施行から出現する女性の「商品」性の変質、出版界における SF 小説の隆盛など、社会的文化的背景を指摘している。

## 第四章 『時をかける少女』の「続編論」——NHK 少年ドラマシリーズ『タイム・トラベラー』

『時をかける少女』の続編的作品に、石山透脚本のテレビドラマ『タイム・トラベラー』、『続・タイム・トラベラー』、後者を石山自身が小説化した『続・時をかける少女』がある。本章では原作の 6 話の全体の主題と各話の相互の続き方の戦略を「大きな仕掛け」、「小さな仕掛け」と名付けて、石山作の続編と比較し、また、主人公和子の純愛物語の質的な位相を論じている。

## 第五章 『時をかける少女』の「文化論」——角川映画という現象

本章では 1960 年(昭和 35 年)以後の日本映画界の動向を概観し、特に 1975 年以降、出版社であった角川が映画業界に参入して以降の代表的な作品や興行成績などの分析を通じて、映像・音楽・言語の流通の相乗効果(原作、キャッチコピーの宣伝、映画音楽、アイドルの物語性)を狙った角川映画の新機軸の戦略を指摘している。

## 第六章 『時をかける少女』の「構造論」——小説・映画・テレビドラマの物語構造

本章では筒井康隆の小説(1965-66)、石山透の続編小説(1973?)、石山透による脚本(1972)、フジテレビ制作の 2 作品(1985,1994)、角川映画の 2 作品(1983,1997)を取り上げて、A・J・グレマスの物語構造分析のモデルを用いて、登場人物深町一夫を論じ、各作品構造の特質の異同を分析している。ここで明らかになるのは、一夫の未来への帰還に対して補助者・反対者のいずれの立場に立つとしても、和子と一夫の恋愛譚の構造は各作品とも一致していることであると述べている。

## 第七章 『時をかける少女』の「語り論」——小説と映画のナラトロジー

本章では芥川龍之介の『羅生門』及び『地獄変』、『藪の中』、『時をかける少女』の小説と映画、テレビドラマを取り上げて、それぞれの語りの機制を論じている。小説の場合、物語の外部、内部の別はあっても、人格化された語り手として登場し、それを「内包された作者」(ウエイン・C・

ブース) が統括する。一方、テレビドラマや映画では、小説とは異なる多様なコミュニケーション手段の合成物を束ねる「映画的語り手」(シーモア・チャットマン) が作品ごとに異なる方法で語っていると論じている。

#### 第八章 『時をかける少女』の「少女論」——少女へのまなざし

本章は原作を恋愛小説として読んだとき、主人公和子は男性の性的欲望のジェンダー的視点で造形された近代的な「少女」の物語であるとし、成長する主人公と受容する時代相を略述しながら各作品がどのように造形されているかを論じている。

#### 第九章 『時をかける少女』の「脱構築」——テキストの解体

原作からテレビドラマ・映画の一連の制作を先行するテキストの解読の連鎖とした場合、読者もその連鎖の論理に呪縛されているとし、デリダやカラーの脱構築の理論を援用しながら、内田有紀主演のドラマは先行テキストの破壊のドラマ性を持つと論じている。

#### 第十章 『時をかける少女』の「メディアミクス」

本章では 1965 年の原作小説の出現以来半世紀にわたる展開を、1、原作のリリズムを活かした映像化の方向性を求める時期、2、アイドルによる映像化を追求する時期、3、物語主義的なメディアミクス戦略に支えられた二次創作的世界を持つ時期、の 3 期に分けて、映画、テレビ、小説、漫画、アニメの作品群を作品主題、主人公のキャラクター、物語の枠組みなどの指標を光源にして概観している。

### 第三部 横溝正史『金田一耕助シリーズ』の物語再構築

#### 第一章 メディアミクスの出発

本章では、1911 年浅草金龍館で上演されたフランス映画『ジゴマ』が作ったブームが映像と活字の相乗効果で出現したメディアミクス現象であるという永嶺重敏の指摘を受けて、江戸川乱歩の『ジゴマ』体験、後続の横溝正史の同時代性を指摘し、後の角川映画の横溝作品のメディアミクス戦略の原風景をここに見ている。

#### 第二章 横溝正史『幽霊男』の映像化とメディアミクス

本章では、横溝正史『幽霊男』の小説・映画に描かれた東京が、前者は特定の場所に結びつかない市街地全体の東京のエロチシズムが浮かび上がるように書かれているのに対して、後者は東京のランドマークを点描し、犯罪都市東京のエログロ・ナンセンスの猟奇性が強調されるものになっているという変容を述べている。

#### 第三章 横溝正史の小説の観光メディア化

本章では、小説・ドラマ、アニメなどの作品を資源とする観光は、作品の追体験的な物語テキストの生成であるという立場から、論者が参加した倉敷市観光課主催のイベント「巡・金田一耕助の小径」(平成 25 年 1 月 26 日・27 日)の報告と『時をかける少女』、『金田一耕助シリーズ』の獲得する市場性の質的相違を論じている。これは作品の S F 的な未来に支配される現在、過去に支配さ

れる事件の謎解きといったそれぞれの物語構造に由来する質的相違という意味で、メディア変換されたテキストの位相と同じであると述べる。

#### 第四部 広がる商品としての表現メディア

##### 第一章 オタク文化を歩く

1960年代以降の日本のマンガ・アニメーション・コンピューターゲーム文化はアメリカを始めとして、欧米・東アジアといった世界的な地域に浸透し、1990年代以降、一部のマニア（オタク）文化としても広く知られるようになった。本章はシンボリックな聖地である秋葉原の江戸から東京に至るオタク文化のトポスの素描である。

##### 第二章 「ニセモノ」ビジネスの光景

本章はこうした日本制作のマンガ・アニメーション・テレビ映画ドラマ作品がアジアを中心とした海外において違法にコピーされ、販売されている現状を、各地のアジア系食品ストア、レンタルビデオ・VCD・DVD店、市場、路上などの実地踏査によって報告している。論者はこうした体験的なルポルタージュを周辺領域の「知的財産権の侵害を糾弾するためでなく、複製による異文化受容の力学」を論じるためのフィールドワークと位置づけている。

##### 第三章 オタク文化と複製の物語

『下妻物語』は、登場人物のロリータとヤンキーのファッション性が、共同体的価値とは異なる「オタク」系の価値観として共有されていく友情の物語であるとし、「2ちゃんねる」の投稿から創作された『電車男』は、共同体の外の「系」としての同質性を相互が発見する恋愛の物語であるとして、両作品ともに「オタク」という志向性や行動様式が人物造形の鍵になっていると論じている。

##### 第四章 資料

本章では、朝日新聞2008年1月に8回にわたって連載された「ニセモノ社会」の「旅」の記事を要約し、現代の情報社会におけるニセモノの持つ特質について言及した後、「関連小年表」として、1996年から2008年までの「メディアおよび本調査関連事項」、「アキバおよびサブカルチャー関連事項」、「文化社会一般事項」の3項目に分けて、関連記事を年表化している。また、「補注」に、「関連新聞雑誌記事 資料データベース」として、1997年11月から2008年3月までの朝日新聞東京版から記事を要約して、掲出している。

##### 資料編（別冊）

映画・テレビドラマ 原作文芸データブック

20世紀メディア年表 付録——図録『時をかける少女』商品等

本編は本論文の基礎データとして、120名の原作小説の作者紹介、映像化作品リスト（作品名・上演日時・会社・監督・出演者）、原作小説書誌データ、映像化用の宣伝コピーが載る本の帯、映像と文芸の批評・研究用語集（「映像と文芸のキーワード」）を掲載している。

また、「20世紀メディア年表」として、「写真・映画・アニメーション」・「通信機器・ラジオ・テレビ・コンピュータ・ゲーム」・「文芸・図書・出版」・「漫画・芸能・サブカルチャー」の各メディア略年表を掲載している。

また、付録として『時をかける少女』の小説本カバー、映画ポスター等の図版を収録している。

## 論文審査の結果の要旨

本論文はテキスト論の立場から、物語論をふまえながら、メディアミックスの現状を作品に即して捉え、メディア市場で流通していく様相に光を当てようというものであり、一貫した方法意識に貫かれている。このことによって、小説から映画への大衆娯楽の移動、さらに集団的享受から個人所有という現代のメディア環境の変化を照らし出すことに成功している。文芸と映像の両者を複眼的に捉えようという本論文の意図は実現されている。

従来の日本近代文学研究は概して文化的教養を持つ高学歴の男性エリートが上中流階級の読者のために書いた文学を対象としてきた。これに対して、本論文が考察の対象としたのは、芥川龍之介を除けば、主として、ライトノベル、少年少女小説、大衆娯楽映画、探偵小説と呼ばれる分野に属し、女性、低年齢層を含む幅広い享受層を想定した作品群である。あえてこれらをクローズアップし、ここに比重をかけながら総体的に論究し、新たな光を当てたところに、本論文の特色と領域開拓的な意義がある。違法コピーなど、現代複製文化の多面的な実態を、倫理的、文化ヒエラルキー的な評価で切り捨てることなく、冷静に問題領域として取り出している点なども、従来の研究視覚にとらわれない本論文の方法が有効に機能した例である。

また、筒井康隆『時をかける少女』の諸論に見られるように、「SF」、「読者」、「続編」、「文化」、「語り」、「少女」、「脱構築」などの独自の視点を駆使した切り込み、欧米の文学文化理論の積極的な援用も大きな特色である。

全体として書籍から映画、さらにはビデオ・DVDとメディアが多様化していくに伴い、享受層がより拡大していく様相を、また享受形態の個人化によって周縁に位置していた人々の欲望が新たに意識化され、物語の更新を促していく機構を、現代日本の社会文化状況に即して捉えた点が評価できる。また、新たに生み出される物語がその度に消費資本主義に回収され、商品となっていく過程が注視されていることは、考察を立体的なものにしている。

一方でこうした研究方法の独自性、開拓性ゆえに持つ、次のような問題点も指摘しなければならない。本論文において展開されたテキスト論的な立場、また「パッケージ」、「構造」、「表象」といった理論的概念が、本論文の立場から十分に説明されているわけではない。理論的応用が必ずしも説得的でない場合もある。近代文学研究、メディア研究の先行研究との関連についても言及が乏しく、新領域の意欲的な模索であるからこそ、もう少し明示的な説明が欲しい。個別の論で言えば、横溝正史『金田一耕助シリーズ』の分析が『時をかける少女』の研究に比して手薄であり、代表作に関するメディアミックスの検討がなお必要である。

以上のような問題点はあるが、本論文は新鮮な研究領域を具体的な分析を通して開示し、文学、文化研究に意義ある貢献をするものとして評価できる。よって、審査委員一同は一致して、本論文が「博士（文学）」（乙）の学位を授与するに値するものであると認定した。